

「企業の環境保全活動をサポートする」取材先：あいおいニッセイ同和損害 保険株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展されたあいおいニッセイ同和損害保険株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの津田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 津田)

●はじめに

京都環境文化学術フォーラムに出展されていたあいおいニッセイ同和損害保険株式会社様にお話を伺いました。同社は保険事業を展開している企業ですが、全国の中小企業に「業種別 SDGs 経営簡易診断サービス」と「カーボンニュートラル導入支援ツール」の提供を開始したそうです。

「業種別 SDGs 経営簡易診断サービス」は15個の質問に回答することで企業のSDGsの取り組み状況を分析、診断、可視化することができます。「カーボンニュートラル導入支援ツール」は企業が脱炭素の取組を推進する導入支援ツールです。具体的に何をすべきかガイドブックにまとめられており環境経営を始めたいけど何をすればいいのかわからない、ノウハウがないといった問題を解決できます。

●Q&A

以下はあいおいニッセイ同和損害保険株式会社の小林様にお伺いした質疑応答をまとめています。

Q 環境取組を行う背景を教えてください。

A 地方創生がきっかけとなっています。長い目で見たとときに地方が元気だと企業が活性化し、地域社会への貢献につながります。

Q 環境対策やサステナビリティの推進において、重視していることは何ですか。

A 具体的なサービスの仕組みを話すことと、具体的なアドバイスをすることです。お客様にまず興味を持ってもらうこと、お客様にとって役に立つことを考えてお話することです。

Q どうして保険を取り扱う企業が環境対策に取り組まれるのでしょうか。

A 中小企業の持続可能性のためです。

Q 今後、環境の取組を続けていく上でどのようなことが課題だと考えておられますか。

A 今はサービスを広める段階なので自社の収益獲得につながっていないことです。

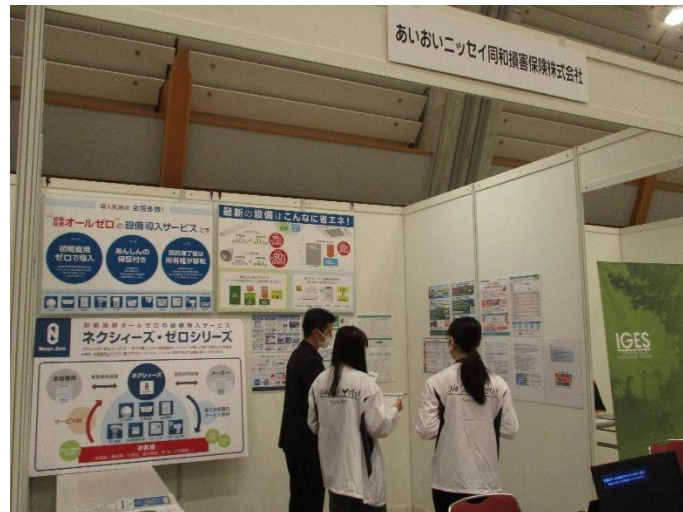
Q 「SDGs 経営簡易診断サービス」や「カーボンニュートラル導入支援ツール」の評判はどうですか。

A 今年の10月から開始し、現在400社が利用しました。無料で手軽にできるため今も利用待ちがあるほど人気になっています。利用企業は中小企業が中心となっています。

以上が質疑応答の内容です。

●さいごに

取材を通して同社の提供するサービスは中小企業が環境対策の取り組みを始めるハードルを下げることや、きっかけ作りになることが分かりました。これまで SDGs の推進に力を入れた経営をするのは規模の大きな企業が中心となっていたことが多く感じていましたが、その取組が今よりもっと多くの企業に拡大していくように思います。

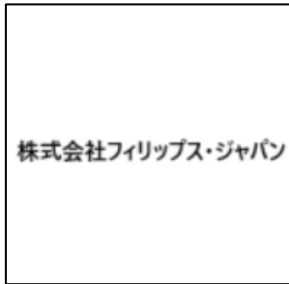


取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 津田

「『健康的な人々、持続可能な地球社会』の実現を目指して」

取材先：株式会社フィリップス・ジャパン



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都国際文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展された株式会社フィリップス・ジャパンへの取材記事です。今回は、インターンシップ実習生として京都府府民環境部脱炭素社会推進課において就業体験中の岡田さんが、WE DO KYOTO!ユースサポーター事業の活動に参加する形で取材しました。

(以下、寄稿者：京都府府民環境部脱炭素社会推進課 インターンシップ実習生 岡田)

●企業概要

株式会社フィリップス・ジャパンは、超高齢者社会を迎える日本の健康と医療の問題に貢献したいと、ヘルスケア分野の変革に取り組んでいるヘルステックカンパニーです。今後、病院で使用されるフィリップスの先進医療機器やパーソナルヘルスと呼ばれるオーラルヘルスケア（電動歯ブラシ）、AED、在宅呼吸器などがクラウド上で繋がることで、人々の健康な生活、予防、診断、治療、ホームケアという「一連のヘルスケア・プロセス」において、革新的な医療ソリューションを提供していきます。医療従事者の皆様、患者様だけでなく、すべての人々の健康な生活への貢献を目指します。

●フィリップス・ジャパンの取組について

今回、株式会社フィリップス・ジャパン 沢 秀樹様にご対応いただきました。

Q1.「健康的な人々、持続可能な地球社会」の実現のために、人々の健康を守ること（社会面の取組）と、環境を守ること（環境面の取組）両面から取組をされていると伺いました。

2つのつながりや相互作用についてどのように考えていらっしゃいますか。

A. フィリップスは、「ヘルスコンティニウム」（健康な生活から予防、診断、治療、ホームケアに至るまで）においてビジネスを展開しています。また、ヘルスケアは全体的につながりを持つものであると考えています。当社は、人々が健康な生活を送り、病気を予防するためのお手伝いをします。また、責任ある企業として、持続可能な方法で、高水準の環境、社会、ガバナンス（ESG）基準に沿って事業を展開しています。私たちは、事業の進め方の中で、パートナーと力を合わせ、当社の運営およびその先にあるものに、持続可能性がより深く根付いて行くような取り組みを行っています。

Q2. 環境性能の面から一押しを教えてください。

A. フィリップスは気候変動への取り組みとサーキュラーエコノミーの目標に沿って、エネルギー効率向上、有害物質の使用回避、製品ライフサイクル全体における希少資源・材料・包装の最適化に継続的に取り組んでいます。例えば、これまで優れた臨床画像を撮影するには希少資源であるヘリウムが大量に必要でしたが、フィリップスのエコデザイン設計により、ヘリウムを99%削減、装置の耐用寿命まで再充填不要にしました。環境にやさしいだけでなく従来品を上回る性能を実現しています。

Q3. 環境に配慮された製品を販売（開発・製造）することについて、フィリップス・ジャパン様にとってのメリットを教えてください。また、環境に配慮されたフィリップス・ジャパンの製品を購入することで私たち消費者にはどのようなメリットが考えられますか。

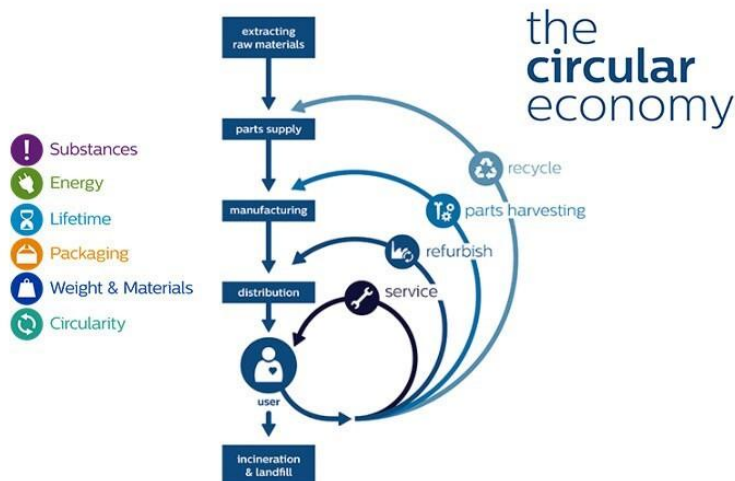
A. フィリップスは循環型の「生産、使用、リターン」パラダイムへのグローバルなシフトを支援する、意欲的な循環経済を目標にしています。下取りや体系的なアップグレード、下取りし新しいシステム同様の高い品質水準を満たした製品へと生まれ変わるなど、双方にとって有益なソリューションの交換を実施できます。

Q4. 日本でフィリップス製品の環境面におけるメリットをアピールすることは効果的と言えますか。

A. フィリップスは、グローバル全体で、2016年～2020年の先進的プログラム「健康的な人々、持続可能な地球社会」の目標が全て順調に達成に向かい、次の段階として、2025年に向けて意欲的な環境、社会、コーポレート・ガバナンス（ESG）目標を設定しました。環境において、「パリ協定 1.5°C目標達成のため、100%エコデザイン、エネルギー効率の向上、再生可能エネルギー源の拡大、循環型経済ソリューションを目指す。」となっています。

●循環型経済について

Q5. ホームページで下の「Circular economy」の図を目にしました。Circular economy（循環型経済）について詳しく教えてください。



A. フィリップスは循環型の「生産、使用、リターン」パラダイムへのグローバルなシフトを支援する、意欲的な循環経済を目標にしています。フィリップスはお客様から返却される予定の大型医療システムを引き取り、再利用することを決定し、機器の下取りを積極的に行い、下取りされた機器のすべてが責任を持って再利用されるように管理することを意味します。

●エコデザインについて



重量と材料

Q6. 重量と材料の取り組みについて教えていただきたいです。

A. ほとんどの製品において製品の軽量化や材料使用量の削減に取り組んでいます。



エネルギー

Q7. 製品のエネルギー効率改善の取り組みの状況や例を教えていただきたいです。

A. 2018年、米国でのフィリップスの事業で使用されたエネルギーはすべて、ロスミラソレス風力発電所で作られた再生可能エネルギーでした。フィリップスは、Science Based Targets イニシアティブで認定された二酸化炭素排出目標を掲げる、世界初のヘルステクノロジー企業となりました。このイニシアティブは、国連グローバル・コンパクト、世界資源研究所および世界自然保護基金が共同で定めたもので、志の高い企業による気候変動対策の推進を目的としています。



梱包

Q8. 発泡スチロールを使用しない 100%リサイクル可能な梱包材が用いられた製品がありますが、こちらの梱包材は広く活用されているのでしょうか。

A. 現在広く用いられていて、将来的には全ての包装をこの梱包材にすることを目指しています。

●2020年までの環境面における目標を受けて

Q9. フィリップス全体で、「2020年に事業において100%カーボンニュートラルになり、すべての電力を100%再生可能エネルギー源から調達する」という目標が達成されたと知りました。フィリップス・ジャパンの再生可能エネルギーで賄われている電力は全体の何パーセントでしょうか。

A. Jクレジット制度※の活用により、フィリップスは日本でも100%カーボンニュートラルを達成しています。

※CO2の削減・吸収量を価値として取引する制度。例えば他の企業が削減・吸収したCO₂の量を購入することで、自社のCO₂排出量を相殺することができる。

<参考：2016年～2020年のプログラム「Healthy people, Sustainable planet」>

「売上高の70%はエコデザインの原則に、同15%はサーキュラーエコノミーの原則に準拠したソリューションによるものとする」、「カーボンニュートラルを実現する」、「業務で発生した廃棄物の90%を再利用し、廃棄物埋立をゼロにする」など、意欲的な目標を設定。

Q10. 現在のフィリップスの総利益のうち、エコデザイン（グリーンプロダクト）による利益、循環型経済の原則に基づいた利益が占める利益はそれぞれ何パーセントでしょうか。

A. エコデザインについて、2021年度はフィリップス全体では70.5%を達成しています。また循環型経済に基づいた収益は、全体の16%を占めています。

Q11. 2020年までの目標の達成状況を受けて、環境面における新たな目標があれば教えてください。

A. フィリップスは、「1.5°C地球温暖化報告書に沿ってCO₂排出量を削減」、「電力の100%および総エネルギー量の75%を再生可能エネルギー源から供給」を2025年に向け掲げた目標としています。

Q12. 国際的な企業として日本で環境に対する取り組みを進めるにあたって、日本特有の特徴または課題を感じられたことはありますか。またそちらに対して今後どのような取り組みを考えていらっしゃいますか。

A. 全世界で行われている環境、社会、コーポレート・ガバナンス（ESG）に関わる活動を参考にしながら、日本の課題解決に合う方法を積極的に見つけていくことが重要だと考えております。

Q13. 環境に対する取り組みを通してどのような社会を実現させたいと考えていらっしゃいますか。

A. 私たちは、有意義なイノベーションを通じて人々の健康とウェルビーイング*を向上させることを目的としています。フィリップスでは、2030年までに、年間25億人の生活を改善することを目指していますが、そのうちの4億人がサービスが十分に行き届いていないコミュニティに属しています。フィリップスおよび当社ブランドのライセンスを付与された企業は、テクノロジーカンパニーとして、「もっと健やかな未来へ」という一貫した信念のもと、人々のためにイノベーションを起こしていきたいです。

*ウェルビーイングは幸福/福祉とも訳され、肉体的・精神的・社会的にも、すべてが満たされた状態を意味する。ここでいう「健康」とは病気でない、弱っていないということではなく、ウェルビーイングの状態を言う。

●取材を通じて

今回の取材を通して、フィリップス・ジャパン様の特定分野を率いる国際企業ならではの影響力や視野の広さから、大きな目標の実現可能性を感じることができました。ご回答いただいた沢様、どうもありがとうございました！

取材日：2022-11-14

寄稿者：京都府府民環境部脱炭素社会推進課 インターンシップ実習生 岡田

「人々と地球の未来に向かって今日も走り続ける」

取材先：三菱自動車工業株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展された三菱自動車工業株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの平井さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 平井)

取材先：三菱自動車工業株式会社

取材日：2022年11月14日

担当者：総務渉外部 田村明博様

インタビュー：ユースサポーター 横江一真、平井鈴音菜

寄稿者：平井鈴音菜

●最新のEVとPHEVに試乗してみた！

新型 eK クロス EV とアウトランダーPHEV に試乗させていただきました。

運転しやすかった～

と言いたかったところですが、横江も平井もペーパードライバー……。

ということで、担当者様に運転していただき、乗り心地を体験しました。



運転している'素振り'を見せる平井. 運転座席にあるシートのマッサージ機能には驚き!

《学習メモ：EV・PHEVとは？》

・EV ：”Electric Vehicle”つまり「電気自動車」のこと。

・PHEV ：”Plug in Hybrid Electric Vehicle”つまり「外部から充電できる、電気またはガソリンを兼ねそろえたハイブリッド車」のこと。

それぞれ伺ったお話や乗り心地について、これからご紹介していきましょう！

まず新型 eK クロス EV は、エンジン音はもちろん、モーター音もほぼなく、走行中は非常に静かでした。滑らかな走りで車内は快適空間。ちなみにアクセルを外して減速する際には自動的に発電するそうです。運転席からは燃費ならぬ電費、電池残量、目安走行距離が見えるので安心。この EV における令和 4 年度の国からの購入補助金は 55 万円だそうです。

一方のアウトランダーPHEV には 1500W まで使えるコンセントが付いていました！アウトランダーPHEV の総電力量は 20kWh で、一般的なスマホ約 1800 個分に値するとか。お家で簡単に充電でき、200V ならば約 7.5 時間で充電完了。またサービスエリアなどにある急速充電器で充電すれば約 38 分で電池残量 80%に！さらに、給電機能もあるため、キャンプや災害時に自動車の電気を他のものに使うことができるみたいです！乗り心地も新型 eK クロス EV に引けを取らない快適さでした。



車内にはコンセント(上)、車外には普通&急速充電口(下)

ん？？これはなんですか？



運転席近くにあった不思議なダイヤル

「このダイヤルで、走行中の道路状況や環境に合わせた走りができるんです。タイヤの前後左右の駆動力を配分できるんですよ」

す、すごい……！

ダイヤルに手を伸ばしそうになるのを抑えながら、いつまでも乗っていたくなる試乗体験を終えました。降車したら、面白い話をもっと聞かせていただこう。

●これまでの歩みとは！？

Q. よく「環境と経済の両立」が課題となっているが、環境への対策とビジネスの繋がりをどうやって両立させている？

「当社が得意とする EV・PHEV をより多くの方に乗っていただくことが環境にもつながっていくかと。環境にやさしい EV・PHEV も生産・販売して、多くの方に乗っていただいています。日本の場合、国からの補助金もでていて社会全体で電動車両の普及をすすめていると思います。」

「ちなみに、三菱自動車は世界で初めて電気自動車”i-MiEV”を量産化して販売しました！また、PHEV も世界で初めて量産していて、なんと今年の国内販売台数は第 1 位です！」

世界初！！確かに、最近ハイブリッド車や EV を街でもよく見かけるようになりましたね。

Q. 実際に EV の普及に寄与していると感じられる協働事例は？

「複数の EV・PHEV のラインナップを持っているので、幅広いお客様に EV を購入いただけることですかね。商用軽 EV などでは運送会社様等でも多く活用していただいています。」

「他にも例えばお花屋さんの様な自然や環境を大切に思っている方に EV を選んでいただくケースもあります。お花や植物といえは…がらっと話は変わりますが三菱自動車の京都製作所では、生物多様性保全の活動として工場内の緑地で、京都に昔からゆかりのある植

物のフタバアオイやヒオウギ、フジバカマ、オニバスなどを育てています。」

お花屋さんからの需要、植物好きの平井にとっては興味深いです！

葵祭で飾られるフタバアオイに、アサギマダラがやって来るフジバカマ……。ぜひともその工場内を拝見してみたいものです！

●周りや意識の変化は？

Q. 環境問題への取組を始めてから、何か変化は？

「毎年発行されるサステナビリティレポートで経営トップのコメントや、各地区・各部門の取り組みが共有されています。」

「さらに環境への取り組みは、三菱自動車だけでなく、お取引先も含めて全体で進めていく必要があります。環境への取り組みの重要性をお取引先の方々と共有するため、説明会を開催して、部品や部品の製造過程における CO2 の削減など環境対応の強化をお願いし、ご対応いただいているところです。」

高い実績は変わらずとも、皆さんの意識はどんどん高みを目指していっているんですね！なるほど、PHEV 販売台数 1 位の実績があるわけだ……。



取材中の横江・田村様と意気投合して盛り上がることも！

「京都製作所はエンジンの工場ですが、各工程でも CO2 排出を減らせないか、みんな色々なアイデアを出して工夫しています。例えば、金属を溶解している炉を囲っている部分は、熱を逃さない塗装を施したりしています。少しでもエネルギーを無駄にしないことで CO2 削減に貢献しています。」

販売車そのものにだけでなく、製造過程にも環境への配慮を忘れない心意気。そんな三菱自動車工業株式会社様の考える”未来”とはいかに!?

●これからの世界の未来に向けて

Q. 私たちは今大学生だが、若い世代に対してどんな行動や意識を期待する？

「最近、工場見学に来た小学生から SDGs について聞かれることが多くなったんですよ。幼い頃から、環境問題を始めとした社会課題について考えるようになってきているんだなあと感じますね。」

なるほど……学校の授業でも SDGs について習うようになったからですかねえ。

「今の若者たちは、”持続可能”への感度が高い。この思いをずっと持ち続けて、ぜひとも

次世代へと受け継いでほしい！」
しかと受け止めました！！！！

●取材を終えて

今回乗せていただいた2台の自動車。個人的には新型 eK クロス EV の乗り心地がお気に入りです。取材中なのに寝てしまいそうでした。でも、キャンプや遠出するときなどは電気の活用が便利なアウトランダーPHEV に乗っていききたいですね。

三菱自動車工業株式会社様は、まだまだこれからも「お客様第一優先」は変わらず、持続可能で環境に優しい自動車開発に取り組まれることでしょう。三菱から生まれた EV や PHEV は、今日も様々な想いを乗せて世界中で走り続けているのです。

その姿勢に、私たちがアクセル全開で応えていきたいですね！



右から田村様、WE DO KYOTO!ユースサポーターの平井、横江
自動車は右が新型 eK クロス EV、左がアウトランダーPHEV

貴重なお話をたっぷりとお話いただきありがとうございました！

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 平井

「バイオマス発電と次世代型園芸施設でカーボンマイナスへ。」取材先： エフビットコミュニケーションズ株式会社・エフビットファームこうち株 式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展されたエフビットコミュニケーションズ株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO! ユースサポーターの山下さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO! ユースサポーター 山下)

エフビットコミュニケーションズ株式会社様は情報通信事業をされていましたが、現在はエネルギー関連事業も行なっています。そして高知県本山町でバイオマス発電所と次世代型園芸施設を組み合わせた地域密着型の農業クラスターを展開しています。隣接するバイオマス発電所の排熱や排ガスを再利用するこのような施設は日本初の取り組みだそうです。バイオマス発電所では再生可能エネルギーとして発電することができ、次世代型園芸施設では高知県最大の年間240tのパプリカ生産を予定しています。

●Q&A

Q. エフビット様はなぜ地域住民の雇用を行っているのですか？

A. 地域住民の雇用によって地域の雇用促進を行うためです。Uターンなどをして働きの口がない町が多いため、エフビットで雇用創出を図っています。

Q. なぜ、元々は通信関係事業だったのにエネルギー開発に携わっているのですか？

A. 通信事業を行なっている際に、電力について考えることがあり、そこからエネルギーにも取り組むことになりました。電力を使っているからこそエネルギーを考える責任もあります。

Q. 高知の山にこのような大規模な園芸施設を建設するのは大変でしたか？

A. やはり大変でした。今の環境のままでいい・何も変えないでいいという声がありました。そこで月に一回住民と話す機会を設け関係を構築しました。住民の要望から防音にしたり煙突の高さを考慮したりしました。

Q. この施設の構想から完成までどのぐらいの期間を要しましたか？

A. 構想から約4年程度です。とてもスピーディーでした。社風もあり素早く取り組み、建設は1年で終わりました。

●感想

バイオマス発電と聞くと環境に良いイメージがありますが、仕組みを考えると確かに二酸化炭素を排出してしまうというネガティブな側面があります。そこで、ネガティブな部分をなくすために、排ガスや排熱を利用する仕組みを作ったとおっしゃっていました。本当に環境に良いことをしようという考え方がとても素敵だと感じました。また、画期的な考えで魅力を感じました。ありがとうございました。



取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 山下

「楽しいこととしてエコなことができる？-その仕組みとは-」

取材先：凸版印刷株式会社・旭化成株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムに、2社のコラボによりブース出展された凸版印刷株式会社・旭化成株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの呉さんと平田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

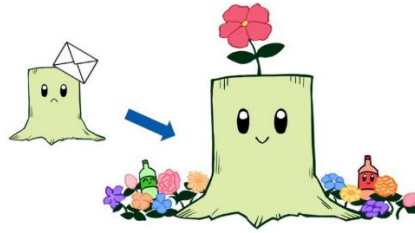
(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 呉・平田)

●「aruku& (あるくと)」アプリと「BLUE Plastics」のコラボ

凸版印刷様のグループ会社である株式会社 ONE COMPATH 様が開発したウォーキングアプリ「aruku& (あるくと)」と旭化成様が提供する「BLUE Plastics」を組み合わせた、「人と地球環境の健康を促す取り組み」は、参加する人が歩いて楽しむことと資源循環活動が同時に達成できるというものです。この仕組みができたきっかけは、リサイクルの重要性を知っていても、回収後どう活用されているのか、リサイクルされた結果を知らない人が多いことからです。取材に応じてくださった旭化成の小西様は、「使用したものがさまざまなものに生まれ変わるというワクワク感を基に、ごみの回収場所まで歩くことで人が健康になり、リサイクルによって地球も健康になれるという社会を作っていきたい」とおっしゃっていました。

●多くの人に楽しんでもらうための工夫

市民一人ひとりが楽しみながら資源循環の取り組みを長く続けてほしいという願いと、そのための工夫もお聞きすることができました。例えば、飲み干したペットボトルを捨てるために「aruku& (あるくと)」ゲーム内の地図上に表示された回収ボックスまで歩きます。歩くことでゲーム内のキャラクターからの依頼（「1時間以内に1000歩あるいて」など）をクリアし、賞品に応募できるカードを得られます。こうして歩いてゲームを楽しみながら、ペットボトルを回収ボックスに入れていきます。つぎに、ペットボトルを分別して回収ボックスに投入すると、「BLUE Plastics」のアプリ内で、そのペットボトルが、どのようなものに作り変えられるかの流れが見えるようになります。また投入するペットボトルの数でキャラクターを育成するなどの楽しむ工夫もあります。このように、これまで意識していなかった行動を「楽しむ行動」に変えることで、地球に優しい資源循環を続けやすくするのだと話してくださいました。



ペットボトルの投入数を増やせば、切り株に花が咲くそうです（「BLUE Plastics」）



アプリの起動画面（「aruku&（あるくと）」）

●周知活動について

「aruku&（あるくと）」アプリは京都府のウォーキングイベントで導入されていたり、企業でも部門対抗で歩数ランキングを競う取り組みに採用されていたりもします。「BLUE Plastics」アプリは東京のファミリーマートの一店舗で実証実験が行われており（2022/11末で終了）、SNSなどでも配信したりするなど周知活動が行われています。また、資源循環を促すサークル「BLUE Plastics Salon」に多くの企業に入ってもらうなど、「一つの企業活動にとどまらず、多くの企業と協力して「共創」していくことが、資源循環型社会の実現には大切だ」と、凸版印刷の兼房様はおっしゃっていました。

●環境問題に取り組み始めてからの変化（取材企業より）

地球の環境は変化しています。その変化を受け取り、企業も変化する必要があると思いました。そのためには「マインドのリセット」が必要でした。大きな変化といえば、「仲間作り」が挙げられます。これまでは、企業はそれぞれに事業を行うことが当然でした。つまり、企業はお互い「競争」する関係でした。しかし、環境問題などに取り組み始めてから、企業は「競争」ではなく「共創」をし始めました。お互いに連携し、情報を共有しながら同じ問題と一緒に取り組むようになったことが大きな変化だと思います。（凸版印刷 兼房様）

●若者へのメッセージ（取材企業より）

若者の声に耳を傾けることが大事だと思います。殿堂にいらっしゃった方の中でも、驚くくらい環境に詳しい学生さんが多くいらっしゃいました。多くの学生さんが学校などで環境について勉強しており、深い知識を持っていると思います。年齢とは関係なく、豊富な知識、また素晴らしいアイデアを持っている若者と話し合うことが重要です。これから企業は、学生さんと多く話せる場を作る必要があると思います。何かご意見がありましたら、ぜひ皆さんと話したいと思っております。（旭化成 小西様）

●取材を終えて

リサイクルしたら、その後何ができているのかについて考えてみたことがなかったため、この仕組みのように目で見てわかるというのはとても効果的な方法だと思いました。リサイクルしなければならぬという義務のような意識ではなく、それを楽しみながらすることでより長く続けられるようにするという工夫はとても面白いと感じました。

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 呉・平田

「商品紹介だけではない！商社が取り組む環境対策とは？」

取材先：株式会社たけびし



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展された株式会社たけびしへの取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの笠井さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。（以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 笠井）

●人にも環境にも優しい！次世代型小型風力発電とは？

皆さんは「風力発電」と聞いてどんなイメージを思い浮かべますか？風力発電とは風で風車を回し、その回転エネルギーを電気エネルギーに変える仕組みのことであり、そこから環境に優しい自然なエネルギーというイメージを抱く人は少なくないと思います。しかし、その一方で様々な課題点があるのも事実です。

株式会社たけびし様は、三菱電機製品を中心とした産業用電機・電子機器を取り扱う商社であり、様々な商品を取り扱っています。その一つに「レンズ風車」というものがあり、その風車は従来の風力発電の課題点を克服できるものとなっています。

例えば騒音問題。通常、風力発電の設置地点では105デシベルの回転音がし、500m離れると減衰して50デシベル程度の騒音が発生しています。つまり、風力発電を設置する際には発電地点から500m以上の土地は確保しなければならないのです。しかし、レンズ風車の場合、発電地点からわずか13.7m離れた距離で45デシベル程度の騒音になり、これは静かな事務所程度の騒音であると仰っていました（風速5m/s以下の場合）。住宅など人がいる場所から50m離すことが推奨されているとはいえ、従来の1/10程度の土地利用で済むと考えると、いかにレンズ風車が静かな回転音で発電できるかが伝わるでしょう。

また、耐久性が高いという特徴もあります。風力発電は風の力を借りるため、風が強ければ強いほど発電量が増えていきますが、あまりにも強い風（台風など風速25m/sを超える強烈な風速下）では暴走や破損可能性があるため停止する仕様になっています。しかし、レンズ風車の場合風速59.5m/sの風にも耐えることができ、通常の台風は勿論、先日、九州を直撃した風速46m/sの台風にも影響は無かったと仰っていました。

他にも同じロータ径の風車に比べて約3倍の出力が出せる、静かでディフューザが鳥の目にも見えるのでバードストライクの心配がないなど様々な特徴があるので、気になる方は是非調べてみてください。



(画像出典：<http://www.riamwind.co.jp/products.php>)

●サステナビリティな会社作りのために

株式会社たけびし様は商社として気候変動対策のために、レンズ風車や zeroboard (CO2 排出量算定・可視化クラウドサービス) など、他社との連携により様々な製品やサービスを展開されていますが、自社内での取組も活発に行われています。一つは 2030 年までに事業活動で使用する電力だけではなく、サプライチェーンで排出される温室効果ガスも含めて実質ゼロにすることです。そのために売電用の太陽光発電の導入、冷房や暖房などの使用電力が上がりすぎないように調整、紙や水道の使用量管理、社有車の電動化促進などをしていて仰っていました。温室効果ガス実質ゼロを目指す難しさとして費用の問題を取り上げておられましたが、その一方で環境対策をすることは会社の付加価値が高まるため ESG 投資に繋がりがやすく、新たな顧客やビジネスの創出につながるため、長期的な目線で見ればメリットの方が大きいとも仰っていました。

また、エネルギー問題や環境問題に製造業が大きく関わっていることから製造現場での取組が重視されている中、たけびし様では従来人手で行っていた作業の自動化や稼働情報の収集・見える化及び分析など、生産効率や品質・予防保全の向上に繋がる取組にも力を入れていると仰っていました。これらの取組は SDGs の目標 7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、目標 8「働きがいも経済成長も」、目標 9「産業と技術革新の基盤をつくろう」に繋がっていることから、一企業の環境問題だけに囚われず、あらゆる課題解決を目指すというビジョンに繋がるのではないのでしょうか。

現状取り組み始めたばかりなので環境対策を始めたことによる変化はまだ把握できていないと仰っていましたが、だからこそ今後どのような変化が見られるのかを期待したいです。



ブースではパンフレットも見せていただきました

●取材を終えて

太陽光や水力、バイオマスなどの再生可能エネルギー（以下、「再エネ」）が日本で稼働している中で、風力が占める割合は小さいのが現状です。しかし、今回の取材を通じて、風力発電の奥深さや今後の可能性を実感することができました。そして、それは風力発電に限らず、他の再エネにも同様に言えることなのだと思います。取材にて「再エネの有効性に関して教育面からも理解・知識の習得が必要だと感じている」と仰っていたように、私たちは未だ再エネのことを良く知らないのではないのでしょうか。今はウクライナ情勢などによる石炭や液化天然ガスの輸入価格高騰の影響で電気代の高騰が続いていますが、世界的には再エネは年々安くなっている国が多いため、今後はコスト的にも環境的にも自分事と捉えて、もっと知っていきたいなと思いました。丁寧に答えてくださった上に、インタビューへの回答をまとめた資料も提供していただき、ありがとうございました。

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 笠井

「お客さまとともに豊かな将来へ」取材先：イオン株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展されたイオン株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの吉田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 吉田)

●イオン株式会社とは

イオン様は国内に約2万店舗、世界では15カ国に出店されており、小売・ディベロッパー・金融等の事業を展開されている会社です(2022年2月末時点)。「お客さま第一」という基本理念のもと、安心安全な商品の調達や資源循環型のライフスタイルの構築、脱炭素社会の実現等、多岐にわたる環境の取組を行われています。

●持続可能な商品の調達

イオン様は、私たちの生活に密接に関わるものは、地球環境にも密接に関わっているとして、持続可能な商品の調達に力を入れていると仰っていました。

開発途上国の生産者と適正な価格で取引をする「フェアトレード」のチョコレートや紅茶、化学合成農薬や化学肥料等に頼らない原料を使用した「オーガニック」な商品としてコーヒーやオートミールをご紹介いただきました。他にも持続可能な漁業で採られた水産物のしるしである「MSC 認証」や、責任ある養殖により生産された水産物のしるしである「ASC 認証」のラベルがついた商品を販売されています。このようなオーガニックや MSC 認証、ASC 認証を受けた商品には、自然環境の持続可能性を追求するブランドとして「トップバリュ グリーンアイ」という緑のラベルがついています。



ご紹介いただいた商品



オーガニックオートミール



フェアトレードのチョコレート

●リサイクルマイバスケット

壊れた買物カゴを回収し、リサイクル原料として 30% 配合し再製品化されたものが「リサイクルマイバスケット」です。お持ち帰り専用の買物カゴで、京都府内 12 店舗において 1000 個限定で販売されています。こうした買物カゴや買物袋の持参がレジ袋の削減へとつながります。



リサイクルマイバスケット

●脱炭素社会実現への取組

2040年までに店舗で排出するCO2等を総量でゼロに、また、その中間目標として2030年までに店舗使用電力の50%を再生可能エネルギーに切り替えることを目指しています。店舗使用電力の削減および再生エネルギーへの転換に向け、太陽光パネルや電気自動車の充電ステーション設置等の取組をしております。

●植樹活動

1991年から継続して「イオン ふるさとの森づくり」という植樹活動をされています。新店舗がオープンする際に、店舗敷地内にお客さまと地域の環境に合わせた木を植えることで、豊かな生態系を育むとともに地域のコミュニティの場としての役割も果たしています。2022年2月末時点で植樹合計本数は約1,242万本になるとのことです。

●取材を終えて

お客さまの将来を守るために持続可能な社会に向けて環境への取組を行う、お客さまに安心安全の商品が渡るように商品の調達をするというように、取材中の節々でお客さまを第一に考えられていることが伝わり、それが大変印象的でした。今回の取材ではオーガニックな商品やMSC認証を受けた商品等、多くの商品をご紹介いただきました。こうした環境や持続可能な社会へ配慮した商品を、買物をする際の選択肢の一つとして手にとる方が増えればと思います。



取材時にいただいた以下のパンフレットも参考にして、この記事執筆しました。(以下、PDF版)

<https://www.aeon.info/company/message/profile/>

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 吉田

「環境との共生を目指して パナソニック様の取り組み」取材先：パナソニック株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展されたパナソニック株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの吉川さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。（以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 吉川）

●環境に優しい製品

パナソニック様は、充電システム ELSEEV（エルシーブ）やリチウムイオン蓄電システムなどの製品を販売しておられます。ELSEEV はパブリックエリアにも設置できる種類が展開されており、電気自動車を充電することが可能だそうです。また、リチウムイオン蓄電システムは、夜間に電気を貯蔵することができ、導入費用・維持費用が安いというメリットがあります。これからは、電気充電スタンドが空いているときにシェアできる取組を試みておられるそうです。



電気自動車用普通充電器



リチウムイオン蓄電システム

●自社が排出するCO2削減への取組

- ・材料を無駄なく使用すること

リサイクル義務がある家電などは、回収した際に再利用できるものは再利用するようにしておられるそうです。また、複雑な設計では、製品の使用が終了した際、分解するために手間と時間がかかり、そのまま廃棄されてしまうことが多いです。そのため、設計を簡単・シンプルにすることで再利用しやすいようにしておられます。

- ・社員個人の取組

企業が環境への取組を行ったり、環境に優しい製品を販売したりしていると社員個人にも環境に対する関心が生まれてくる、と今回取材を受けてくださった山内様はおっしゃっていました。そのため、会社の内部で社員同士、環境に関するお話をする機会が増え、より環境に興味を抱く輪が広がっていく、ともお話しくださいました。

●利益と環境対策の両立

環境への取組は、金額に換算することが難しく、利益に直結するとは言いがたいのが現状です。

お客様の意識調査では、「多少、値段が高くても環境に良い製品を購入したい」という声は多いですが、実際には価格が高いと市場では受け入れられないと思っています。

したがって、お客様に対価を認めて頂ける、環境に良い製品を生み出していくことが企業の姿勢として大切なのだそうです。

●取材を終えて

取材を通して、私の知らないパナソニック様の環境への取組が多くあることを実感しました。特に、製品の設計を簡単にすることで分解・再利用を容易にする、ということは私たち利用者にも恩恵があることだと感じ、顧客にも環境にも優しい取組をしておられることを知りました。また、お話を聞かせてくださった山内様は、「パナソニックがあることによって環境が変わったと言ってもらえるようになりたい」という夢を私に教えてくださいました。企業が環境に良い製品を生み出すことで、社員・顧客へと環境に対する意識が広まっていけば、環境に優しい社会へと繋がって、山内様の夢もかなう日が来るのだろうと強く思いました。

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 吉川

「SDGs への貢献と、地域課題の解決」取材先：日産自動車株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展された日産自動車株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの中島さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 中島)

●ブルー・スイッチとは

「ブルー・スイッチ」とは、EV（電気自動車）の持つ価値を利用して地域課題の解決を図る日産自動車の活動です。環境保全、エネルギーマネジメント、災害対策や地方での交通課題などそれぞれの地域が抱える課題に対し、EVの持つ特性を活かしてソリューションを見出していくこの活動は、2018年度に始まり年々全国へ広まっています。EVは二酸化炭素を排出せずに走行する車で、他にも大容量バッテリーを搭載していること、どこでも充電が可能であること、静粛性に優れていることなど様々な強みを持つため、これからもその活躍が期待されています。このように電気自動車のパイオニアとして日産自動車様は、その技術と経験を活かしてブルー・スイッチをはじめ社会へ貢献するための挑戦を続けています！

●ブルー・スイッチの活動例紹介

千葉県

2019年9月、台風15号が上陸した際に、千葉県の自治体や福祉施設にEV「日産リーフ」53台が貸与されました。日産リーフは公民館や保育所、高齢者施設で非常用電池として使用され、生活に欠かせない家電用品へ電力を供給するのに大変役立ちました。このように移動手段だけでなく、電力供給源としても使用できるEVによって災害支援を実現できます。

阿蘇市・佐世保市

阿蘇市と佐世保市では、温室効果ガス削減と観光活性化のため、日産自動車様と協力してEV優遇策を展開しています。優遇策対象となる駐車場が無料で利用できたり、宿泊施設や道の駅での割引も利用でき、EVでお得に市内を観光できます。2021年9月には自動車業界で初めて環境省と「国立公園オフィシャルパートナーシップ」を結びました。阿蘇市や佐世保市のように、EVを促進しながら環境保全への理解を広めていき、かつ地域の活性化を実現する取り組みがさらに全国へ普及していくことが予想されます！

今ご紹介したのはほんの一例ですが、他にも日産自動車様は「日産わくわくエコスクール」という児童向けの環境教育やEV講座等を実施するなど、脱炭素化への取り組みを進めており、EVが社会へ貢献する形はまさに無限大です。

●インタビュー

☆ここからは、日産自動車株式会社の石田様にインタビューをしていきたいと思います！



●日産EV車の強み

中島：ズバリ、日産のEVの強みはなんですか？

石田様：まず、力強く滑らかな走りという、クルマとしてとても魅力的だというのが私たちのEVの誇れる点だと思います！そしてEVの開発に長く携わっている日産だからこそお客様へ提供できる高い安全性と質の高いアフターサービスです。日産は2010年に世界で初めてグローバルに日産リーフの量産販売を開始し、現在はEVクロスオーバー日産アリア、軽EVの日産サクラと3車種あり、これまでの累計販売台数は70万台を超えています。EVのバッテリーが火災をおこしたというニュースがたまに報道されますが、日産のEVは今に至るまでの12年間、一度もそのようなことは起こっていません。

中島：なるほど。私も日産様の「たま」という、戦後すぐの1947年に開発された鉛電池で走る自動車をはじめとした歴代のEVについて知り、その歴史の長さにびっくりしました。



●EV車の利便性について

中島：EV先進国の中国やノルウェーでは充電渋滞が問題になったことがあったと聞きましたが、日本でEVが主流になったときの利便性についてはどのようにお考えでしょうか。

石田様：まず充電方法ですが、30分で約8割の充電が完了する急速充電と、ゆっくり時間をかけて充電する普通充電の2通りあります。そしてあまり知られていないのですが、現在EVの充電器は全国に約30,000基設置されており、その中の約8,300基が急速充電器です。EVの普及に向けて充電口が複数ある急速充電器の普及も始まっています。また、日本政府も充電器の更なる設置を目標としており、充電施設の拡充が進んでいます。つまり、利便性についてはEVの普及に伴い向上し続けているため心配ご無用です。

●若者に期待すること

中島：ありがとうございます。では最後に、若者に期待することを教えてください。

石田様：とにかく、もっと日産のEVについて知ってほしいです。カーボンニュートラルに大きく貢献できるというのはもちろん、EVの安全性、快適な走り、乗り心地、静粛性など皆様の日常生活をより快適にできるという点も大変魅力的だと自負しています。皆さんが主役となる時代はもうすぐ来ます。その時のために脱炭素化への取り組みをたゆまず続けていただければと思います。皆様の若い力に期待しています！

中島：石田様、どうもありがとうございました！



●取材を終えて

今回日産自動車様取材させていただいて、地域課題解決にEVを活用しつつSDGsの目標達成にも貢献するという素敵な活動を知ることができてとても嬉しく思いました。地球規模課題を自分ごととして考えることはもちろん大切ですが、身近な課題を放置せずに、どちらにとっても有効にアプローチできるブルー・スイッチは有意義で革新的だと感じました。そして今回実は日産EVの「サクラ」を試乗する機会もいただきました。とても静かでスマートな、感動的なドライブでしたので将来の自分の車の有力候補となりました(笑)。石田様がおっしゃられたように、私たちは諦めず脱炭素化をはじめ様々な目標を達成するために邁進し続けなければいけないと、改めて気を引き締めることができました。

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 中島

「お客様のニーズを大切に、EV車の普及へ！」取材先：エムケイ株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展されたエムケイ株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの横江さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 横江)

●環境に配慮したEV車の導入

エムケイ株式会社は、京都府京都市南区に本社を置くタクシー会社であり、近年では、タクシー車をEV車に続々と切り替え、また、地域に密着したサービスの提供にも心がけられています。EV車は、電気自動車であるため、ガソリンを使わず、二酸化炭素排出量削減にもつながり、環境にやさしい自動車です。これから先も続々とEV車を普及させていき、EV車を広めていきたいという方針です。



取材の様子

●EV車の利便性

EV車は、利便性として、エンジンがついていないため、車内が静かであるということがあげられます。タクシーのドライバーとして、イメージすることとしては、お客様とのコミュニケーションを取ることが求められると思います。車内が静かであると、コミュニケーションをとるドライバー・お客様にとっても、非常に良い影響を与えると思います。



●EV車の課題

EV車は、長く走れる車が少ないというのが現状の課題です。エンジン車に比べると、走れる距離は少ないです。EV車では、フルの性能をまだまだ活かし切れていないというのが現状です。また、これから先EV車が続々と普及していき、エンジン車が減少していけば、EV車が充電中で走れる車の台数に制限が出てきて、お客様にご迷惑をおかけする可能性もあるということです。EV車は、電気自動車であるが故、充電問題なども起こってくるのです。

●エムケイ株式会社のアピールポイント

エムケイ株式会社では、タクシーの車種をミニバンにし、大きな車でゆったり乗れるような車種を選択されています。お客様に寄り添うサービス、お客様ファーストにこだわっておられます。車を使う会社であるからこそ、環境への取り組みを押し出しています。また、ENEOSと連携し、EVのバッテリー交換サービスの検討を行うなど、他企業とも連携しつつ、エネルギー関係への取り組みを重視されています。



ENEOS との協業によるバッテリー交換サービス

●環境問題に取り組んでからの変化

エムケイ株式会社が環境問題への取り組みを始めてからの主な変化として、お客様からの意見の変化が大きいそうです。EV車にしてからお客様から良い意見、悪い意見含めて多くの意見をもらうようになりました。また、EV車の更なる普及のため、通常のEV車に加えて、客室が豪華で、富裕層の方をターゲットとしたBMWのEV車両を12月から運行する予定です。

●取材を終えて

取材を通して、エムケイ株式会社さんの環境に配慮した取り組みに対する前向きな姿勢は、「お客様のニーズにこたえることを第一優先として、EV車の普及により、多くの人にEV車に興味をもってもらいたい！」という思いからきていることが印象に残りました。また、タクシー会社ならではの視点から環境問題へ取り組まれており、お客様とのコミュニケーション意識など地域に密着したサービスの提供にこだわっていることが素晴らしいと思いました。

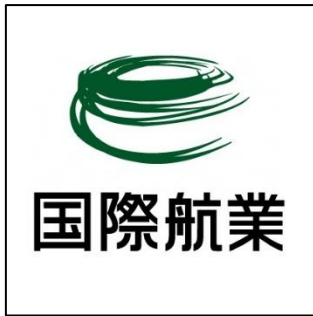


経営企画部の美濃部様（左から1人目）にご対応いただきました

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 横江

「森林の未来を担う」取材先：国際航業株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展された国際航業株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの綾さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。
(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 綾)

●国際航業とは

国際航業さまは75年にわたって社会資本整備の一翼を担ってきた建設コンサルタント企業です。国際航業のまちづくりに関するノウハウと、国内外における数々のメガソーラー開発実績を活かして、自治体が進める「ゼロカーボンシティ」を目指し、マスタープラン政策やZEB化、エネルギーモニタリングなどを支援しています。

●SDGsへの取組

国際航業さまは、2030ビジョンとして「情報をつなげる力で、人・社会・地球の未来をデザインする」を策定しました。そして、地球環境保全、人々の暮らしや地域社会との共生、国土保全・強靱化、災害対策という4つの課題分野に取り組んでいます。

●気候変動対策

国際航業さまは、脱炭素社会改革へ積極的に取り組まれています。中でも私が最も興味深いと感じたのは、「波浪計測」サービスです。海洋レーダーは短波帯や超短波帯の電波を利用して、リアルタイムで海象を陸上から計測するものです。沖合から遠く離れた場所、最大100kmまでの海洋表層流、波浪を1時間ごとに陸上から計測可能です。海洋がどのような動きをしているのか、これを計測することで、海洋浮遊ゴミの到達地点を特定することができ、ゴミの回収をすることが可能になります。海洋ゴミを減らしていくことは重要ですが、私はすでに海へと流出してしまったゴミを回収するにはとても良いサービスだと思いました。

●診ま森（みまもり）

「診ま森」は、リモートセンシング技術により森を診断し、最適な森づくりをサポートするもので、「森の健康診断・森の健康指導」と呼ばれています。

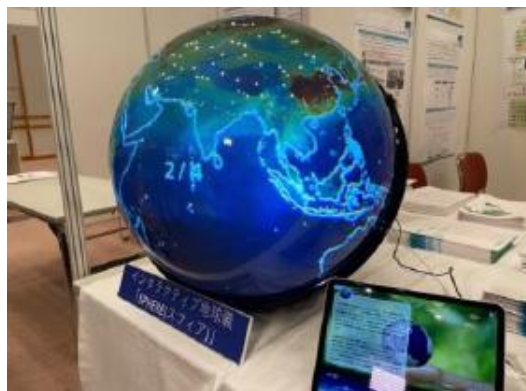


まず「測る」部分では、リモートセンシングを通して森を上空から、そして横からスキャンし森の健康状態を示すデータを入手します。縦横の計測を行うことで、森林の空間情報を詳細に取得することが可能だそうです。

次に「診る」部分では、樹木の分布や本数など森林の状況を把握します。樹頂点抽出、林相区分図の写真を見せていただいて、色によって木の高さや種類がわかる点が非常に興味深いと感じました。

最後に「活かす」部分では、取得データをもとにそれぞれの地域ごとに活用支援を行います。「地域によってサービスに違いがあるのか」という私たちの質問に対しては、「それぞれの地域の実情を踏まえた上で、森林管理提案をさせていただくため、日本国内でも地域によって大きく差が見られます。」と答えてくださいました。

現在「診ま森」は、日本の多くの自治体様、事業者様はもちろん、海外でも展開されています。



ブース展示の様子

●森林の未来

国際航業さまは、私たち若い世代に対して、「我々の技術によって森林管理のしやすさを向上させて、森林を継承していきたい」と話をしておられました。林業は古来から存在する職業ですが、近年多くの地域で人材不足が顕著化しているそうです。また、木材の運搬も海外とは異なり、狭い道路で行うために少しずつしか行うことができず、国産木材の価格が高額である要因の1つだそうです。

地球環境保全に必要な存在である森林。その管理と継承が今後より必要になっていくのだと改めて感じました。

●取材を終えて

私たちの世代には、気候変動問題に関心のある方が多くいます。しかし、年代が異なるために、魅力的な取り組みをされていても、同じ問題に取り組んでいる企業さまを知る機会が非常に少ないなと感じました。

取材を通して、気候変動問題、特に脱炭素に対して積極的に取り組まれている国際航業さまの森づくりサービス「診ま森」は次世代にも大きな影響を与えるものだと強く感じました。そして、そのような素敵な取り組みをされている企業さまの活動を、より沢山の方々に知って頂きたいと思いました。

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 綾

「『ネットワーク』の力でエネルギーと社会・人を結ぶ」

取材先：エコリンクス株式会社



2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展されたエコリンクス株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの塚田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 塚田)

●「エコリンクスのネットワークは施工業者への教育から始まった」

取材に応じてくださった菰池様の言葉である。

事業を行うに際して、あくまで人と人とのかかわり、企業と企業のかかわり、そして社会という大きな枠組みの中でのかかわりを無視することはできず、あらゆるつながりが社会課題への解決に向かう力になることを取材の中で実感した。

●「再生可能エネルギー専門家」

エコリンクス株式会社様は、「IT とエネルギーの融合」を理念に、再生可能エネルギー専門のスペシャリストとして社会活動や人々の日常生活を維持していくために欠かせないエネルギーと社会・人を結ぶことで、社会課題の解決を目指している。その中でも、太陽光発電をはじめとする再生可能エネルギー事業において、設計・申請代行等発電所構築支援、発電監視、メンテナンス、エネルギー業界の人材育成など、高い専門性で地域社会をサポートしている。(エコリンクス株式会社 HP [「事業理念」](#)[「会社案内」](#)より)

●「再生可能エネルギー」と「脱炭素」の関係性について

また、「再生可能エネルギー」と「脱炭素」を起点に、地域の GX に向けた事業への挑戦に取り組んでおり、主に3つに分類される。

1. エネルギーの地産地消

太陽光発電による PPA(Power Purchase Agreement)や自己託送サービスや発電予測・需給管理を通して、施工から運用に関わる施工事業者の業務をサポートする。

2. 電力の供給調整・BCP 対策

蓄電池、EV の利活用サービス、充放電管理サービスにより、EV 設置住宅における EV 動力の再エネ化、また電力消費の効率化を図る。

3. 再生可能エネルギーの普及・脱炭素

エデュケーションサービスにより再エネ・脱炭素を実現する人材育成を行ったり、再エネ由来排出権化支援によりコーポレート PPA で電力の購入コストを長期に抑制したりできる。



地域のGXに向けた事業への挑戦(エコリンクス株式会社様のパネル展示から)

●環境に配慮すること、そして世の流れはいつい…？

次に取材を通して印象に残った点を質問形式で振り返る。

Q.発電所構築支援による効果はどんなもの？

A. (太陽光) 発電所の目的は、社会インフラである電力を安全に長期にわたって供給する事であり、構築支援はこの目的達成のために設計、各種申請、施工の支援をおこなっている。多くの(太陽光)発電所が完成し、安定して稼働する事は、再生可能エネルギーの拡大という、直接的な脱炭素社会実現のための手段であり、構築支援はここに貢献していると考えている。

Q. 環境への対策とビジネス(収益)の繋がりをどのように両立させている？

A. 会社の目的は社会的責任のもと太陽光発電を普及させていくこと。それ自体が環境対策にもなるので、両立というよりもむしろ、両者はともに伸ばしていけるものであると思う。

Q. 直流で使用できる電化製品の実証実験のその後は？

A. 昨年度行われた取材以降、特に状況は変わっていない。家電メーカーに直流で使用できる電化製品を作ってもらうことが必須になるが、あくまで家電メーカーには個別の販売戦略があり、利益重視。現状は、世の中の流れを待つということになるが、それでもそのような製品はエネルギーロスがより少ないというメリットがあるため、徐々に直流の電化製品が主流になってくるのではないかと思う。



●ネットワークが課題解決の鍵を握る

太陽光発電を含め、再生可能エネルギー事業において様々な取り組みが行われているが、最先端のシステム開発や細やかなサポート支援まで充実している点は明らかである。しかし、最も注目すべき点はエコリンクス様が築き上げてきた強固なネットワークであろう。施工業者の教育から始まったとされるこのネットワークは、その後、「発電所の点検をやってほしい」「故障してしまっただうすればよいかわからない」など現場の様々なニーズに対応する中で徐々に発展してきた。そして、長い年月をかけてできたつながりによって新たな事業が生まれ続けている。脱炭素に取り組む姿勢は業界全体で変化しており、環境意識は少しずつ高まりつつあるようだ。とてつもなく大きな環境の課題に対して、単独で道を切り開いていくのではなく、人とのつながりや企業同士のつながり、社会におけるつながり、そのような相互関係の中で課題を解決していく姿勢が必要であり、取材を通してネットワークの重要性を痛感することとなった。



取材時の様子(取材に応じてくださった菰池様)

●最後に

「今やっていることの延長線上をコツコツ継続すること。困っている人のお手伝いをする事で太陽光発電の普及に努めたい」と菰池様はおっしゃった。脱炭素という壮大なテーマにおいてもやるべきことをしっかりと見極める姿に感銘を受けた。

今後は、環境に良い取り組みの実現可能性が世の中の流れによって左右されるといったことはあってはならないと思う。そのためにも、様々な情報がある中で感受性を活かし、思いついたことを柔軟に実行する若者世代の重要性を、我々ユースサポーターとしては伝えていきたい。

参考

<https://www.eco-linx.com/> (エコリンクス株式会社 HP)

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 塚田

「環境を考える象印の魔法」取材先：象印マホービン株式会社

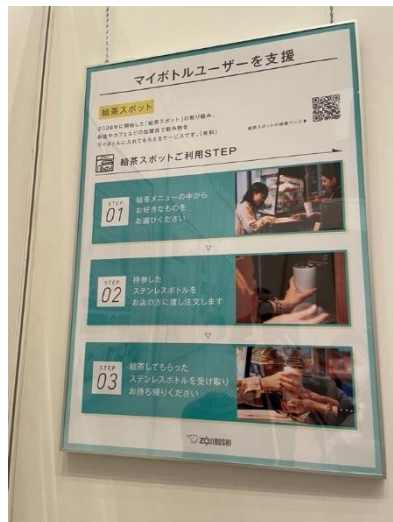


2022年11月14日に国立京都国際会館で開催された「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにブース出展された象印マホービン株式会社への取材記事です。今回は、2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの呉さんと平田さんに、取材の報告として記事を書きました。

(以下、寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 呉・平田)

●給茶スポット

象印マホービン株式会社は炊飯ジャーなどの調理家電のほか、ステンレス製のまほうびんの水筒なども取り扱っています。2000年代の始めごろまで、水筒は子どもが持つものというイメージが強く「マイボトル」という言葉もありませんでした。そこで、大人もマイボトルライフを楽しんでほしい、と象印様が2006年に考案されたのが「マイボトルキャンペーン」です。マイボトルキャンペーンでは給茶スポットという仕組みを開発し、マイボトル持参の方へ給茶サービスを提供しています。全国約150店舗で実施されており、京都では2022年11月現在、10店舗で給茶サービスが提供されています。



給茶スポットの概要

●外部団体との連携

消費者がマイボトルを使う上で感じる主な不満点には、①荷物になる、②自分で飲み物を用意しなければならない、③使ったマイボトルを洗わなければならないという3つの理由がありました。そのような不満を解決するために象印様は外部団体と連携して新たなサービスを開発されました。

・「マイボトル洗浄機」の開発

使用したマイボトルを洗わなければならないという不満を解決するために、東大阪の「中農製作所」と共同開発で「マイボトル洗浄機」を開発しました。洗浄機にマイボトルを入れた後、ボタンだけ押せば簡単にマイボトルの洗浄が可能です。

・「象印マイボトルクローク」の開始

LINE 公式アカウントで注文・決済すると、好きな時間に好きな飲み物を専用ロッカーで受け取ることができるサービスです。使用したマイボトルを店舗またはロッカーに預けると店舗で洗浄・保管してくれるため、自分で飲み物を用意し、使ったマイボトルを洗浄する手間がなくなります。

●象印マホービン株式会社様に以下の質問に答えていただきました。

Q. 給茶スポットのような SDGs のための今後の取り組みについて

A. 今は実証実験の段階ですが「マイボトルクローク」や、「マイボトル洗浄機」で、マイボトルの利用促進を図っていきたいです。

Q. 社内でされている環境保全の取り組みについて

A. 元々社内では自主的にマイボトルを使う社員が多かったのですが、改めて 2019 年に「社内ペットボトルゼロ」宣言をし、デスク周りなど会社全体でペットボトルを出さないということを実施しています。社内の自動販売機からもペットボトル飲料をなくし、各事業所にウォーターサーバーを設置しました。従業員だけではなく、会社に来られるお客様にもペットボトルを出していません。これまでもマイボトルを使用する社員が多かったことから、スムーズに取り組むことができました。

Q. 環境問題への取り組みを始めてからの変化について

A. 他の業界とのコラボが増えました。企業はもちろん給茶スポット加盟店の日本茶業界や、大阪府・京都府、滋賀県などの自治体や甲南女子大学などを始め、様々な団体と連携をして、マイボトル普及の活動をしてきました。

Q. 同業の他社との環境意識の差について

A. 特にありません。今、この業界全体でマイボトル普及に向けて同じ方向に進んでいこうという流れになっており、互いに切磋琢磨しています。また、他社との差別化のために、水筒が他のいろいろな荷物に馴染むようにくすんだカラーにするなどトレンドを取り入れ、年齢・性別に拘らず、使い勝手の良いものを提供しています。

Q. 水筒の利用が多い小学生などを対象にした環境教育などの実施について

A. 「海とマイボトル」という冊子を作成し、マイボトルを軸にプラごみについて解説をする他、まほうびん記念館ではその歴史やマイボトルの使用を促すための企画なども含め、マイボトルの役割の多様性など学生に PR することも行っています。



トレンドを意識したカラーや使用する人のニーズに合わせた特徴を備えたボトル

●取材を終えて

マイボトルを少しでも多くの人に使用してもらえるよう、ボトルのデザインをはじめ、象印マイボトルクロックや学生、自治体との連携など幅広く活動されていることを知り、驚きました。また、実際に会場にあった給茶体験コーナーでいれたお茶は温かくて美味しかったです。便利なペットボトルの使用に頼るといふ私たちの消費行動や意識改革のためにも、給茶スポットを利用したり、マイボトルとして自分のお気に入りの一本を見つけたりすることがSDGsの達成のためにも重要なことだと思いました。



給茶体験コーナー：丸久小山園西洞院店様のお茶でした

●感想

今回の取材を通して、どれだけ多くの企業様が環境問題に取り組んでいるのかについて考えることになりました。例えば、象印様の場合、社内でのペットボトル使用を禁止したり給茶スポットを作ったりすることでペットボトルの使用を減らすような努力をされています。そのようなさまざまな努力が集まると、大きな影響力を及ぼすことができると思います。これからも環境問題を解決するために、大きくても小さくても多くの努力をする必要があると思います。

取材日：2022年11月14日

寄稿者：2022年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 呉・平田